

自然と水

私の住む福住町は、どこを見ても近くに森がある。標高は五百メートルほどの大和高原の一角にあり、豊かな森が広がっている。休日、私は父の手伝いをするために田んぼへ出かけた。森が切り開かれてきたため田んぼはまだ奥にも、この棚田を利用している人がいる。だから、春の田植えのときに、水の確保が大変だ。先に奥の人が使うので、後からでないといけない。それに、山の湧き水を使っているのは、田んぼより低い位置にある。そこで、わずかな水流の勢いを使って、パイプを通り、田んぼに水をいれるので、父は角度などを調整し、より多くの水を入れようとしている。こんなに変なことをするのなら、近くの水源地から水をとればいいのと思っただけだが、簡単な手に入ることで済むのにはどう

天理市立福住中学校 三年

榊原 あき

して使わないのだろうか。父に聞くと、「あの水源池はお金がいるねん。砂でろ過されていて、年一回、砂を変えてるみたいで手間かかるやろ。」山の水なのにお金がかかるのには、とても驚いた。でも、そのくらい貴重だということなのだろう。水は貴重だ。しかし、生活にはたくさん必要だ。私の家では、知り合いに井戸を掘ってもらったそうだった。その井戸は二つあり、金気が多かったそうだった。四十年前ほど前、井戸の一つは台所の水がめのために、そこから飲料水として使われていた。もう一つは、他の水まわりで使われていた。井戸はきちんとして過さず、きれいでいるので飲料水にできるくらいきれいだった。井戸水だけではない。川の水だってきれい

だった。井戸水でまかないきれないとき、私の家では風呂水を川から引いていたそう。他の町から来た人は、川の水と聞いて、一瞬心配した様子だったが、あまりの水のきれいさに心配も消えたそう。昔は、どのくらい透き通った水だったかは知らないが、安心してきるほど良い水だったようだ。

今、家の井戸は片方だけ植木の水やりのために使っている。飲料水とまではいかないが、見た目は市の水道水と同じような気がする。ただ一つ思うことは量が限られていることだ。自然の水だから、たくさん出そうと思っても限界がある。学校の水だって同じだ。私たちの学校では長年の伝統で毎年菊を育てている。大量の水が必要なので、山の水も使っている。少しづつ流れてくる水を大きなバケツにためておき、水やりに使う。作業道具を洗うと、水流も弱く、量も限られているので、大切に使う。すると、秋には大輪の見事な菊が咲きそろう。

私の家の前には山があり、その間に小さな道路がある。また、山のふもとに小さな水路があり、三年前までは土の水路だった。雨が

降ると落ち葉が詰まり、その度に家の人が落ち葉を引き上げないといけなかった。ある梅雨の時期の夜、大雨になり、山から土砂や木の枝、落ち葉などが流れて詰まり、水路からあふれた。そして、運悪く床下浸水になって大変だった。このようなことがあったため、水路にはU字のコンクリートボックスが入れられた。以後、水があふれたことは一度もないが、サワガニなどの小動物は見られなくなってしまう。近代化によつて動物の住める場所が少なくなり、きれいな水の証拠となるサワガニも消えた。これは寂しいことである。川にはゴミも見られるようになった。

今の私たちは衛生上きれいな水を、大量にくりかえし使える。しかし、その分水の大切さを忘れてはいないだろうか。自然の大切さは決して忘れてはならない。人間の生活を重視するあまり、どんどん自然が壊されていくのだ。できるだけ、自然の姿を変えずに、感謝して水を大切に使いたい。